渇愛（下）

丹羽文雄

渇　愛（下）

丹羽文雄

新潮社版

© Fumio Niwa 1974, Printed in Japan

渇愛（下）
昭和四十九年八月二十日印刷
昭和四十九年八月二十五日発行
著者・丹羽文雄
発行者・佐藤亮一
発行所・株式会社新潮社
162東京都新宿区矢来町七十一
電話・業務部(03)二六六一五一一一
編集部(03)二六六一五四一一
振替・東京八〇八
印刷所・三晃印刷株式会社
製本所・新宿加藤製本株式会社
定価・九〇〇円
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目
次

蠢動 7
夏の終わり 20
展示会前後 36
落選 88
善悪の境 100
慚愧ということ 113
松の内 124

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

その夜の出来事 144
再出発 160
強迫観念 177
酒の人 201
墓参と再婚 217
翌年 233
報告書 246
あとがき 270

装幀　井田照一

渴愛（下）

蠢動

雑誌「四季」の編集会議が進行していた。樋口を中心に、編集部が全部顔をそろえていた。

次期「四季」の編集の大綱は、ほとんどきまっていた。これが最後の会議であり、各自の受け持ちも決定していた。

「銀座の画廊というものを、この際取材するのも意義があるかと思うのだが」

と、樋口がいい出した。「絵画ブームも、一応峠を越したといわれている。しかし、果たしてどうなっているのか。ブームの跡を追ってみるのも、意義があろうと考えられる」

「画廊に協力してもらうことを前提としての取材ですか」

と、ひとりが訊いた。

「そうだ、わが社の方針として、露骨な批判的な態度はいけない」

「そういえば、今度の目次には、絵画のページが少ないような気がします」

「銀座の小さい画廊で、書画と篆刻の遺作展をみました。名前の知らない人でしたが、『四季』にほしかったなと思いました。『四季』に出せば、関心を呼びますから、遺作展は成功したでしょう。あんまり人ははいっていなかったです」

「だれかこの中で、恭遷の名を知っているか」

と、樋口が一同を見まわした。

「恭遷？　何恭遷ですか」

「高辻恭遷だ」

すぐには返答がなかった。しばらく経って、

「井野先生のところで、そういう名前の文人画を見せてもらったことがあります」

井野は芸術院会員であり、日本画家であった。

「それだ、高辻恭遷というのは」

樋口は、高辻恭遷を「四季」の編集会議にかけることに、それほど積極的でなかった。「四季」の目次には、手頃な材料だと考えられたが、自分の手から完全にはなれてしまっては、困るのだった。しかし、「四季」の編集長として、たびたびそうした材料を扱っているだけに、編集部に無断で遺作展をひらけば、あとで何かと問題にされることは、

判っていた。一応は話題としてだけでも提案しておくべきだと、気が折れかかっていたときであった。

「高辻って、編集長の奥さんと何か関係があるんですか」

樋口が具合い悪そうにして、

「実は、そうなんだ。志紀子の祖父にあたる。文人画と書の方面では、玄人間に十分みとめられていた。が、商売にしなかったので、ただ茶人として知られているにすぎなかった。そういう人柄だった。しかし、ぼくとしては、家内の祖父だからね。持ち出すのが、ちょっと具合い悪かったんだ」

編集者が笑いながら、

「いつもの編集長としては、別人の感がありますね」

それで、一同の笑いになった。

「それでいきましょう」

ひとりが決定的にいった。

「しかし、今までうずもれていた高辻恭遷だ。調べるとなると、大へんだよ」

「それがぼくらの仕事じゃないですか」

「雑誌で大いに宣伝しておいて、遺作展を開こうじゃないですか。必ず成功しますよ」

と、ひとりがいった。

「遺作展？　しかし、まだそこまで考えてないよ」

樋口は、面はゆかった。はじめの計画は、自分ひとりでこつこつとやるつもりであった。恭遷のものを私物扱いにする気持ちがつよかった。私物扱いにしなければ、思ったようなうまい汁が吸えないからである。編集長の職権の濫用を考えないではなかったが、濫用といったところで、「四季」の場合は濫用とはならない。高辻恭遷の身内として、同時に雑誌「四季」の編集長の二役をかねることは褒められこそすれ、非難されるはずはなかった。

――こんなことで神経質になっているのでは、大きなことは出来ないぞ。どうやらこの自分という人間は、案外に肝玉が小さいのかも知れない。

樋口は、編集部の意見にやむなく応じるという態度をとった。

「こうしたことは、これまでの『四季』の編集方針の一つでした。編集長が今日まで、この材料をにぎりつぶしていたのは、身内という気持ちからだったでしょうが、『四季』にとってはマイナスですよ」

編集次長が笑いながらいった。

「いや、ぼくも妻の祖父が、そんなに偉い人物であったということはよく知らなかったのだよ」

「編集長の奥さんが染色をやっていられるのも、やはり祖父の血のしわざなんですね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「数年前に、フランスで死んだ染山画伯の遺作展を四季社でやったことがありました。雑誌で宣伝しておいたので、個展は成功しました。それほどの画家でもなく、現在よりも将来に期待をかけられていた画家でしたが、あるいはそのまま埋もれてしまったかも知れなかったのです。費用をさっぴいたあとの余剰金を遺族におくったので、大へん感謝されました」

「恭遷遺作展の費用は、ぼくが持つよ」と、樋口がいった。

「いけませんね、編集長は公私を混同している。この仕事は、四季社がやるんですよ」

「それは判っているが、どうも身内となると、気がひけるのでね。もし失敗をしたら、どうなる。それならはじめからぼくが責任をもってやる方が、気持ちも楽だ」

「四季社はすでにそうしたことに経験があります」と、次長がきっぱりといった。「高辻恭遷遺作展には、編集長はただの編集長としてふるまって下さい。さっそく責任者をきめて、取材することにします」

万事が樋口の考えている以上にうまくはこびそうになった。樋口にとっては、僥倖にひとしかった。

「そして、君が儲けるのだろう」

と、月岡が樋口の腹を読んだことがあった。

——この仕事には、志紀子をタッチさせてはならない。

遺作展はあくまで樋口個人のものであって、高辻家のものにしたくなかった。

「雑誌に発表するときには、単に遺作展だけでなく、高辻家の先生の画室や、茶室など、撮りたいですね」と、次長がいい出した。

恭遷の画室は、そのまま残されていた。四畳半で、茶室のつづきであった。そこはほとんどいつも閉められていた。茶室は、恭遷の時代のままであった。

「恭遷先生を偲ぶという意味から、使用された筆硯は是非撮りたいですが、仕事場や茶席を撮るとき、編集長の奥さんのお母さんに、ご登場願いたいです」

と、いった。

「家内の母親か」

樋口は、困った顔をした。

「編集長の結婚披露パーティーで、奥さんのお母さんがぼくらのあいだで評判になりました。若くて美しいお母さんです。何かの機会に、是非『四季』にご登場を願いたいと思ってたくらいです。これは、いい機会です」

「しかし、君、撮るのは恭遷に関係したもので、人物じゃないよ」

樋口は、当惑してみせた。内心、月岡がよろこぶだろうと思った。

「お茶は何流ですか」
「さあ、何かね、ぼくはよく知らないが、まあ高辻流とでもいうのだろうね」
「あんまり聞いたことのない流儀ですね。それじゃ是非美しいお母さんに登場願って、高辻流の後継者ということで、カラーでいきますか」
「本末転倒はいけないよ」
と、笑った。
次号の「四季」の編集には、柱となる二本の特別記事のほかに、銀座の画廊と高辻恭遷の誌上遺作展が追加された。
それぞれ担当者もきまった。
高辻恭遷の親友知己をさがし出すことが、最初の仕事であった。恭遷の作品のありかをつきとめることであった。恭遷の知己には、現在活躍している画壇の大家が多かった。編集者は、そのひとりひとりを訪問した。作品所有者の中には、知名人も多く、恭遷の作の愛好家には、一筆書いてもらうことにした。峯沢染色工房の峯沢も、「四季」の編集者の訪問をうけて、作品を撮らせ、書くことを約束させられた。
編集者とカメラマンが、下見のため、井の頭の家に来た。
三重が、その日の夕方、志紀子にいった。
「おじいさんの遺作展を、『四季』が誌上で行なうのですってね」
「そんな話、樋口から聞いてなかったわ」
「樋口さんから電話がかかって来て、間もなく編集者とカメラマンが、下見に来ましたよ。あらためて二日あとに来るんですって。お茶室で、私も撮るといってました」
「『四季』の編集は、贅沢な、ごちゃごちゃした、政治経済抜きの文化雑誌だけど、ああいう豪華な雑誌がとくに売れるらしいのね。文章よりも写真が多くて、見る雑誌ね。峯沢先生の染色を大きく取り扱ったことがあったでしょう。おじいさんのものは、地味だけど、『四季』がいかにも取り上げそうなものだわ。今日まで取り上げなかったのが、おかしいくらいよ」
「樋口さんが編集長をしているおかげですね」
「どうしてそのこと、私に報告しないのかしら」
「仕事のことは、おたがいにあまり話合わないんでしょう」
志紀子がうとうとと眠りかけていると、樋口が帰って来た。鍵のあけ方、絨毯の上の歩き方、服の脱ぎ方の気配で、相当酔っていることが感じられた。志紀子は胸の中で、顔をしかめた。顔が露骨にしかめっ面になったのには意識がなかった。
——酔っぱらいを夫にもつ妻は、いつもこんな気持ちだ

ろう。

志紀子は、夫の酒くさい匂いに慣れることが出来なかった。日本酒を好むので、その匂いはことにつよかった。匂いの中にも、よい酒と安物の酒との区別があるようであった。志紀子は、ひとつベッドであることが恨めしかった。中間にサイド・テーブルをはさんで、別々のベッドであれば、夫の酒くささから逃げていることが出来る。寝室の狭さが、恨めしい。

志紀子は眠ったふりをしていた。そのまま樋口が眠ることもあるが、妻を抱きよせることもあった。志紀子は本能的に、夫の口を避けた。が、最後まで避けられるものではなかった。志紀子に出来ることは、その回数を出来るだけ少なくすることだった。

志紀子はベッドをすべり出て、洗面所にはいった。口をすすいだ。顔や胸もとを冷水で拭った。全身を拭いたいところであったが、がまんをした。

ベッドにもどると、夫は眠りかけていた。

「お母さんに電話をかけたんですって？」

と、話しかけた。夫は眠りから呼びもどされ、

「え、何？　うん、お母さんに電話をかけたよ」

そして、目をあけた。

「おじいさんの書画の遺作展を『四季』が扱うんですって」

「うん、そういうことになった。君に報告してなかったが、いずれ井の頭の家で社のものに会うだろう。ぼくが恭遷先生のことを、ちょっと話すと、みんな乗気になったんだ」

「『四季』という雑誌が、今日までおじいさんの書画に目をつけないのは、おかしいと思ってたわ。埋もれている秀れた芸術を発掘することに、『四季』の雑誌の意義があるんでしょう」

「それだけではないが、そういうことも社の一つの方針としている」

「峯沢先生から、おじいさんの遺作展をやらないかといわれたこともあるのよ」

「君は賛成してくれると思ってた」

「お母さんも撮るのね」

「それは担当者に任せてある。つづいて遺作展をひらく」

「どこでするの」

「銀座の画廊を考えているが、まだ決定してない。恭遷先生の知合いをさがし出して、作品の借り出しをお願いする。それが出来ないところでは、カメラにおさめる」

「売買するんじゃないでしょうね」

「遺作展というだけで、売却は目的ではない」

と、樋口は目をつぶっていった。

そのまま夫婦は、眠っていくようであった。しばらく経って、

「どれだけ恭遷先生の作品があるか、知ってるか」

と、樋口が訊いた。

「知らないわ。おじいさんの画室の押入の中にまとめて、しまってあるわ」

朝の食卓で、志紀子が生野菜をおいしそうに食べていると、

「うまいかね」

と、樋口が訊いた。

「おいしいわ。どうして？」

「兎が夢中になって食べているように、音をさせて食べている」

「音をさせないわけにはいかないわ。どうしたって音はするでしょう。行儀が悪いというの？」

樋口は、生野菜を食べなかった。野菜を食べるなら、漬物であった。

「小さいときからの習慣だろうね。ぼくの田舎では、生野菜を食べないよ。野菜にはめぐまれた環境だったからね。とくに生野菜を摂取する必要がなかったからだろうね」

「いまにあなたも生野菜を食べるようになるわ」

樋口はコーヒーと、たまごを食べるだけで、パンを食べなかった。

「よくそれでおなかが持つわね」

「朝がいちばんおいしいときくけれど、はらがくちくなっては、頭の回転がにぶるんだ」

「からだ中お酒がのこってるからでしょう。あなたのお酒は、すこし異常じゃない？　そう考えたことはない？　ストレス解消とか、疲れをとるためのお酒でなく、あなたのは、ごはんをたべるようにお酒をのまずにはいられないのね。汗の中にも、お酒の匂いがするわ」

「君の酒嫌いは、多分に心理的なものがあるようだ。泥酔して、醜態をさらしたことを、いつまでも恥じているからだ。男なら珍しくもないことだが、女だけに、こたえているのだろう。お酒が嫌いだと君がいうのは、自分の恥を二度とくりかえしたくないからだ。気の毒に思うよ」

「いまの内はいいけど、その内にぐでんぐでんに酔っぱらって帰り、靴もぬがず、廊下に仰向けに倒れて、眠ってしまうようになるでしょうね。そうなったら、私は介抱しませんよ。捨てておくわ。酔っぱらいの世話なんか、まっぴらよ。いくらお酒のみでも、あなたのいまの年齢では、すこし早すぎるわ。五十をすぎたお酒のみでもないのだから」

「しかし、君のお母さんは、日本酒が好きではないか」

「母のようなお酒のみなら、歓迎しますよ。度をすごさないから。あなたのいまの調子だと、朝の内からのみはじめそうよ。そうなったら、お相手にしませんよ。あなたがそばに来ると、くさいわ」

樋口は笑って、

「そういえば、うちの奥さんのそばによると、紺屋の匂いがする」

「紺屋ですって？」

「いつか紺屋の藍瓶をのぞいたことがあったが、君の髪にふとそれに似た匂いをかぐことがあるよ。自分の匂いというものは、本人には判らないものだ」

志紀子は、ショックをうけた。手を洗い、服をとりかえるが、いちいち髪を洗うわけではなかった。

「私にそんな匂いがする？」

「するよ、かすかだがね」

「いまは化学染料を多くつかっているから、そんな匂いのするはずはないのだけど」

「ぼくはちっとも気にしてないよ。ぼくが酒くさいのは、仕方ないだろう。君も気にするな。妻はそれに馴れるべきだ」

——慣れることは絶対に出来ない。嫌いなものを好きになれというのにひとしい。それは精神とか、心情の問題ではない。

と、ハンドルを握りながら、志紀子は朝の夫との会話を思い出した。

——私の中には、あるかたくななものがある。融通のきかない、がんこなものがある。つまり私は、相手に妥協することが出来ないのだ。妥協した方がよいと判っていても、妥協することが出来ない。あくまでも自分を、たてつらぬこうとする。そのことが自分を幸福にしてくれない欠点だと判っていても、自分ではどうすることも出来ないのだ。

富士野との離婚も、結局志紀子がおのれの我をたてつらぬいたからであった。富士野は最後まで離婚に反対であった。樋口は、自分のえらんだ夫であった。自分の責任であった。

——あれ以来、樋口はずうずうしく、金を入れてくれない。金を出すのが損だというふうに考えているらしい。

「結婚するときの約束を守ってちょうだい」

あるとき、志紀子があらたまって夫にいった。

「結婚の約束？」

樋口は、とぼけていた。

「このマンションの借賃と生活費を、仲よく半分ずつ出し合うという約束だったでしょう」

「うん、ちょっと都合が悪かったんだ」

「悪かったといういい方は、悪くなくなったら、約束を履行するという意味？」
「もちろんそのつもりでいるよ」
志紀子は、唇をゆがめた。
「私ね、そのあなたの根性にこだわるの。出せないなら、出せないといってくれたら、私だって訳の判らないことをいってるんじゃないわ。知らん顔をされることが、不快なの。自分がだまってたら、妻がだまって払ってくれると、それをあてにして、とぼけていられるのが、とてもいやなの」
「そうだったね。ぼくは高辻家の養子ではなかった。家賃や食費を払う義務があったのだね」
と、苦笑した。その顔を、志紀子はしばらくみつめていた。
「私だって、あんまり大きな顔は出来ないわ。まるまるお母さんに、おぶさっているんですものね。染色をやってたところで、そこから生活費を捻出するまでには、あと何年かかるか判らないわ。果たして自分の染色が、お金になるのか、それさえ危ないものだわ。お母さんがついていてくれるので、金銭的な問題をわすれ、自分の好きな道をつづけているんだけど、もしそうでなかったら、染色なんかとうに止めていたでしょう。そういう私が、あなたに催促するのは、すこし理屈がとおらないかも知れないけど、第一お母さんは、結婚以来あなたがきちんと約束を守っているものと思ってるわ。お母さんにお金を貰うとき、これこれが必要だからと、いちいち明細書を口にしたことは一度もないの。金額だけを口にするわ。お母さんは、だまって出して下さる。私を信用しているからよ。あなたが約束を守らないと知ったら、何と思うでしょうね」
「二人分の生活費じゃないか。大した金額でもない。高辻園芸につぎこんだ金額にくらべたら、比較にならないだろう」
「高辻園芸は、立派に利潤を上げていますよ。そりゃはじめの内は、土地を提供したり、温室を建てたり、費用一切をお母さんが出してたけれど、その投資も十分に回収しているんですからね」
「ぼくがその内に利潤をまわすようにならないとも限らないではないか」
と、声に出して笑った。
「あなたと結婚したのは、あなたという先物を買ったという意味？」
「そういうふうに解釈してもいいね。表現がすこしへんだけど、娘を嫁にやる両親は、多かれ少なかれ、そういう気持ちじゃないかね。婿の出世を勘定に入れているものだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.